

[要旨]

ズールー・ナショナリズムにおける「曖昧さ」の縮減

—1930・40年代のズールー語教科書出版における
白人行政官と保守的ズールー知識人の協調—

上林 朋広

本論文は、1930年から50年にかけての南アフリカ連邦ナタール州（現クワズールー・ナタール州）のアフリカ人教育におけるズールー文学・歴史教育を分析し、同期間のズールー・ナショナリズムの内容とその広がりをも明らかにする。具体的には、学校教育で使用されたズールー語の教科書と、シラバス及び試験問題など教科書の読み方を規定したと考えられる史料を用いることで、主任原住民教育視学官であったダニエル・マック・マルコムを中心としたナタール州教育行政と保守的なズールー知識人の協力のもとで生み出されたズールー語の歴史叙述が、人種隔離政策と親和性を持つようにズールー・ナショナリズムを特定の形態へと導こうとする試みであったと主張する。

20世紀前半におけるズールー語の歴史叙述の果たした役割については大きく分けて二つの立場がある。一つは、ズールー・エスニシティを強調した保守的知識人とアフリカ人統治に関わった白人行政官の協力体制に焦点を当て、彼らが人種隔離政策を正当化したという側面を強調する立場である。他方は、ズールー人の歴史叙述、特に歴史小説を分析対象として、植民地支配への抵抗の可能性を見出す立場である。しかし、前者の分析の射程は、アフリカ人統治行政とアフリカ人知識人の協力関係を対象とするにとどまっており、学校教育で使用された具体的なテキストを対象としているわけではない。一方で、文学研究者に代表される後者の立場は、テキストの内容にのみ焦点を当て、それが学校教育で学生に特定の価値観を教えるために利用されたという側面を等閑視してきた。上記の研究動向に対し、本論文ではズールー語による歴史叙述への教育行政の介入の影響を分析することで、教室において学生がズールー語で執筆された教科書を読むという行為に、特定の社会的規範を教え込む役割が期待されていたことを明らかにする。